

第3章

研修レポート

Jambo! 人と動物が息づく国ケニアから



東京都立千歳高等学校

教諭 佐藤 鉄郎(ケニア班)

1. 見るもの聞くこと、驚きの連続

最初の訪問先であったキアングイ・セカンドリースクール。生徒との質疑応答の時間でのこと。

「日本では泥棒が捕まるとどうなりますか?」

一瞬、なぜこんな質問をするのか、その意図が分からなかった。その生徒が言うには「ケニアではみんなの前で火あぶりになります」とのこと。彼は、日本でも泥棒は火あぶりか水責めにされるとでも思ったのだろうか。

その後、出会ったケニア人や日本の専門家らに聞くと、確かにそのとおり。泥棒は捕まるとその場でみんなにつるしあげられ、タイヤに体をはめこまれ、そこに油をかけて焼かれてしまうという。人々ははやしたて警察も咎めないという。火あぶりにする理由はといえば、見せしめのため、人々が鬱積した不満を解消するため、殺さなければ次にその泥棒が誰かを殺すかもしれないから、などいろいろ。それにしても泥棒の家族らの立場はいったいどうなるのだろうか。

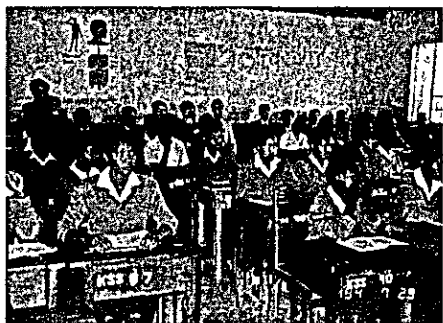
バスでの移動中、なかばまどろみながら車窓から外を眺めていた時、道路わきで立ち小便をしている人を見た。「ふーむ、世界に悪名高い日本人の立ちション習慣はケニアでも健在か」などと思った瞬間、その用を足している人が女性だということが分かった。髪は長いし、何よりも立派なバストが女性を証明していた。ロングスカート風の巻き物をして立ったまま、ややかがみかげんで用を足していた。

ことほど左様に外国に行けば見るもの聞くことすべてが新鮮で興味深い。私のケニア研修旅行は次々にくりだされる新しい光景・情報などに刺激され、感動する旅行であった。

2. 私の途上国認識は変わった

ところで、ケニアへの旅は感動だけの旅ではなかった。深く考えさせられる問題も少なくなかった。

ケニアからの帰り、トランジットのためにスイスで1泊した。チューリッヒ空港からホテルに向かう車の中で、私は何とも言えない安心感を覚えた。ケニアではやはり



キアンガイ・セカンダリースクールの教室の風景(左)と授業をする青年海外協力隊員(右)

緊張していたのだと、その時初めてさとした。そしてスイスでの安心感は先進国と開発途上国との違いに根ざすものであって、ケニアがその安心感を社会に浸透させることは相当に困難なことだとも思った。

こうして、実際にケニアの地を踏み、ケニア人の肉声を聞くことで私の途上国に対するイメージは大きく変わった。これまで、途上国とはいずれ先進国にキャッチアップする国だと単純に考えていた。つまり、発展の遅れは量的なものにすぎないと考えていたのである。しかし、今回の旅行を通じて両者の違いは質的なもの、つまり単純に時間が経過すれば解消するというようなものではなく、根本的な質の変化がない限り解消しえない違いなのではないかと考えるようになった。

こう考えるようになった理由は複雑だが、その主なものをあげれば2つ。

ひとつは植民地支配の影。ケニアで買い物をしていて異様に思ったのは、商店のオーナーがほとんどインド人だということだ。彼らはイギリスの植民地支配の時代にケニアに入った人たちの流れをくむのだという。目に見ることはできなかったが、工業でも

インド及びイギリス資本の支配は今日なお続いており、民族資本はおそらく15%にとどまるだろうとのことであった。ケニア経済の自立的な発展の基盤は今日なお植民地支配の影に制約されているといえるのではないか。

もうひとつ、厳しい自然環境の問題がある。人口の増加に伴って、かつて動物の王国であり人間が住んでいなかったところまで生活圏が広がっている。現金収入を得るための炭焼きは森林を裸にし、山羊などの飼育は過放牧、そして草地の砂漠化をもたらす。そのような土地での耕作は困難をきわめる。

実際、私たちが訪れた農村(キツイ市郊外)では今期のトウモロコシ栽培は全滅。トウモロコシの間に植えられたピジョンピーという豆がわずかに実りをもたらしていた。炭も山羊も農民の生活を守るためには不可欠なものだ。不可欠なものを得るために環境は不可逆的な破壊を被る。こうした悪循環のなかで、出口はなかなか見えてこない。

もちろん、国際協力事業団やNGOの団体などがこうしたケニアが直面する問題に対



社会林業訓練計画プロジェクトを視察
(キツイ)

していくつかのプロジェクトを実施し、それらは、目に見える形で成果をあげている。私たちがそうした現場を実際に見学することができた。

しかし、どのようにしたらケニアが自立的に発展できるかという質問に対して、明確なプログラムは誰からもどこからも得られなかった。

3. 途上国について一層 確信を強めた一面

さて、ケニアの現状から一面で途上国のイメージを変えた私であるが、別の面ではこれまでもっていた途上国のイメージを一

層確信しました。それは以上のようなさまざまな意味での困難にもかかわらず、そこに住む人間は明るく、人なつっこいということである。彼らのなかには、先進国といわれる国の人々が失いがちな真の意味での人間の豊かさか脈々と息づいていた。

訪問した学校では、どこでも生徒たちがさわやかな笑顔で迎えてくれた。彼らの澄んだ目、屈託のないしぐさは今でも強く印象に残っている。ある小学校ではJICAプロジェクトの現地スタッフが、そこでの植林事業協力の現状を一生懸命説明しているというのに、子供たちが勝手に歓迎の歌と踊りを始め、私たちの目と関心をそちらに奪いもした。彼らは土で汚れた制服を着、裸足であったが、そこには躍動する生命力があった。

子供たちだけでない。大人も同じ。同じ植林プロジェクトを見学したときの夜、現地従業員らが歌・踊りなどを私たちに披露してくれた。聞けば80歳にもなる人も加わっていたという。売り物ではない手作りの酒や伝統的な料理なども私たちを楽しませてくれた。そして食事のあとのディスコパーティーでは、私たちをも仲間に加えてみ



どこの国でも子供たちは元気いっぱい

んなで体をひとつに合わせるかのように踊った。その交わりのなかで私は、国や言葉はちがっても人間は人間として同じ、そんな実感を強くもった。

豊かさとは何か、この問いに正確に答えられる自信は私にはない。しかし、便利で高価なものが増えることだけが豊かさだとはとうてい思えない。ものの豊かさはむしろ人間の心の豊かさ、心のゆとりをなにものかに手渡してしまったことの代償であるかと思えるときがある。その意味では開発途上国にこそ、人間が本来持っている感情の豊かさ、気持ちのふれあいなど、総じて人間そのものが息づいているのだと思う。私は自分自身の2年間の青年海外協力隊の経験を通じてそのことをいちばん強烈に実感し、そして今回のケニア旅行を通じてそのことを一層強く確信した。

4. 開発教育についての一視点

いまどきの若者、たとえば高校生は無気力で無関心だといわれて久しい。しかし、私にはそれはあまりに皮相的な判断に思えてならない。特に途上国の問題などは、問いかける側がリアリティと熱意を持って語



ケニアの小学生は歌と踊りがじょうずだ

りかければ必ず応えてくれるものがある。生徒の反応は概していい。

それはなぜか。私の独断的な考えでは、途上国の問題には彼らが生きていくうえでのヒントが豊富にあるからだと思う。

多感な高校生は、私たちが想像する以上に、どう生きるかということについて関心と意識がある。途上国の人々は経済的にきびしいながらも人間としては純粹でゆとりのある生活をしている。それが彼らに何かを語りかけるのであろう。その意味で、私は開発教育の原点には、人間が生きるとは何か、本当の豊かさとは何かを、生徒とともに考えていく視点が必要であると思うが、いかがであろうか。

南は南、北は北、を超えて

～メキシコ、ホンデュラスで感じたギャップ～



山形県立天童高等学校
教諭 大沼 佳明(中米班)

1. メキシコシティ

(1) JICA事務所訪問

次長の寛氏からの概要説明は、①当国は1人当たりのGNPが1992年度で、3900ドルに達し、1994年OECDにも加盟、またNAFTA(北米自由貿易協定)の締結などによって中進国から先進国入りを目指す段階に至っている、②メキシコの二面性——先進国と途上国の両面をもつ——に起因する「援助」の仕方の難しさ、③都市と農村の経済格差、④NAFTAによる工業化路線のなかで米国に優勢な競争にさらされる農業と中小企業の問題、⑤増大する都市人口といわゆるスラムについて——人口8000万のメキシコにおいて都市と農村の経済格差などの事情から人口の都市集中が起こり(メキシコシティをとってみれば約2000万とのこと)、重大な社会問題を引き起こしている、等であった。

工業化と自由貿易路線のなかで衰微する農村社会といった問題は、農業県・山形の人間として他人事とは思えない。1993年度のGATT批准をめぐる米の自由化問題を連想する。「市場経済」というものは場所を

問わず「同じ問題」を地球大に階層的に生み出すのかな、と考えさせられた。

(2) 教育テレビ研修センター・プロジェクト(CETE)

CETEは、日本からの機材供与・日本人専門家の派遣・研修員の受け入れを組み合わせた典型的なプロジェクト方式の開発援助である。目的は、メキシコ教育テレビの番組制作の指導者養成を通じて当地の教育テレビ番組の向上を図るものである。

見学の後のメキシコ人カウンターパート3人も含んだスタッフとの懇談の内容は、①日本の熾烈な受験競争に関わる質問、②日本側からは当地の「テレビ中学」に対する質問、③先住民インディヘナ(20%、50種族)に対する教育や放送の状況、等であった。メキシコの教育については、資料によれば1993年9月から中学校の義務教育化がなされたばかりであり、1990年度の統計では初等教育就学率は86%、中等学校は43%、高等学校は26%となっている。広範な大衆の高い教育レベルが民主主義と社会の安定的発展を支える、という前提に立てば、この方面でのメキシコの課題は大きいと言えるかもしれない。

(3) 日本メキシコ学院 (LICEO)

この学校は日墨の相互理解と教育文化の交流を図るために設立された。メキシコ在留の日本人子弟及び日系人子弟を主に対象とした日本コースと、メキシコ人を主な対象としたメキシココースが併設されている。ここで印象的なことはとえば、学校内に設置されたオゾン濃度測定機である。「世界最悪」の評をとるこの都市の大気汚染は、こうした高級住宅地にも容赦なく襲いかかるようだ。午後には汚染値が高くなり、野外での運動は不可能との由。

(4) 地震防災センター(CENAPRED)

この施設は、日本の無償資金協力により1990年3月に建設され、機材も日本の供与による。協力分野は、実大スケールの構造実験手法とそのデータ解析技術の移転、アカプルコ沖の断層が引き起こす地震が400kmを伝播しメキシコシティに被害を及ぼすメカニズムの解析、などである。

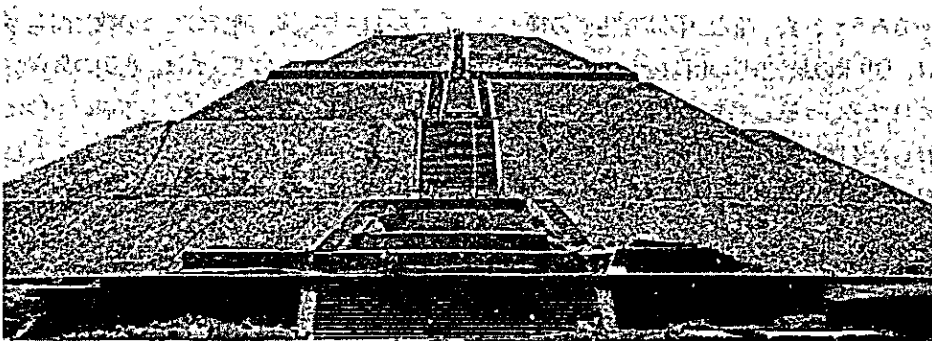
日本人専門家のチームリーダーの室田氏による興味深い話――

「日本ではコンピューターで明快に解析できる、解答がすぐ出る超高層のような、技術的にみれば易しいものばかりを金にま

かせて作るし、そうしたものを押しつけたがる傾向がある。しかし、メキシコのような土地に必要なものは、日干煉瓦の建築のようなコンピューターで解析できないような、つまり、解けない問題、技術的に分からないものにアクセスする能力なのだ。日本は建築の面でも、明治維新以来、それまでの木造建築のようなネイティブな文化をキャンセルして技術と知識で分かる範囲ですべてを作ろうとしてきたが、メキシコは国際的貿易の発達の中にあっても、もともとある文化の土壤に根ざすものをやめるという選択はしてこなかった。だから往々にしてメキシコに来る日本人専門家が知的にはひどくみすばらしい、と感じてしまう状況が生じる」

(5) ティオティワカン遺跡・国立人類学博物館

ティオティワカンは、メキシコシティから北東へバスで1時間ほどの所に位置する。2kmにも及ぶ「死者の道」に沿ってA.D.100年～900年のメソ・アメリカ文明のいわゆる「古典期」につくられたいくつものピラミッドが威容を誇る。そのなかで最大の「太陽のピラミッド」に登ったが、これは225



太陽のピラミッド(メキシコ)



地震防災センター(メキシコ)

m×225mの方形の基底部、高さ65mの壮大なものである。これが、馬も車も金属器もなしで作られたとは！この遺跡の見学の後、再びメキシコシティ中心部に戻り、「国立人類学博物館」を見学する。ガイドの案内で、主にアステカ文明とマヤ文明の展示を見学した。先住民の造形的能力の高度さと多彩さは、全く驚嘆に値するものばかりだ。

2. ホンデュラス

ホンデュラスの首都テグシガルパにある空港は、日本の地方空港よりもっともっと貧相なたたずまいである。

夜に到着してしかも停電中、ということもあろうが、真っ暗な「国際空港」の様子は、「中米の最貧国」の困窮をいきなり突きつけたという感じである。もともと、人々はいたく闇達でたくましい。10歳程度の子供が小銭稼ぎのために外国人とみるや荷物運びに殺到してくる。うかうかしていると荷物が奪われかねない殺気のようなものに気後れしてしまう。

(1) JICA事務所・大使館表敬

所長の長瀬氏の話の中で特記すべきは、電力事情の話。水力発電に依存するこの国で、ダム貯水量の低下のため（原因は少雨によるというが定かではないとのこと）に1日12時間の停電が続いており、この状況が短期間のうちに改善される見通しはきわめて暗い、とのこと。しかし、ホンデュラスでは、電力事情が少々悪くても生活できるたくましさがあるようだ。

大使館表敬では、濱野大使により、①資源に恵まれず加工貿易に依存する日本は世界各国に友好国を作る必要がある。同時に国連における日本支持勢力を増やすという意味からもODAは大きな役割を果たしている、②貿易相手国として（資源供給国や日本企業のマーケットとして）の中南米の重要性、③日本人移民への物心両面における支援、④ホンデュラスについては、中米5カ国中最貧国で日本のODAもいちばん多い、日本は経済的パートナーとしてより政治的パートナーとしての要素を外交上重視している、といった内容が話された。

(2) 国立教育研究所 (INICE)

ここは、日本の無償資金協力によって建設された。研究所の目的は、現職教員に対する研修の実施、研究のための教材開発等である。所長との懇談では、当国の教育が抱える問題点、たとえば、最下層の子供はお腹がすいて勉強ができない、とか1人しか教員がいない学校の割合が62%と高いこと、などの説明があった。資料によれば初等教育において、最終学年到達率が1988年で43%、絶対的貧困水準以下の人口比率は73%、となっている。

むべなるかな、である。

(3) シグアテペケ地区の青年海外協力隊員の活動の視察

この地域の5カ村で舗装もされていない険しい山道を、バイクで指導に回っている、という幸田氏の案内で、ここの平均的な零細農家のマルコス家を訪問した。彼はここで堆肥づくりの指導などを行っている。

こうした隊員の地道な努力には、頭が下がる思いだ。

また、素朴で実に人柄のよさそうなマルコス夫妻の、文明の利器とは縁が薄い質素な暮らしぶりに、妙な懐かしさを覚えたのは私だけであろうか。それとも、こうした感じ方は物質文明に飽いた日本人の傲慢というべきだろうか。ともあれ、こうした家族的経営の小規模農家が、その地において充足した生活を営み得る、ということが、今日の問題破壊や都市人口の爆発といった問題のなかで重要な課題となっている。山林や農地はそれになかった守り手を必要としており、それはアメリカ型の効率と収益重視の企業的農業経営ではなく、その土地に根ざした人々なのだ、と言われる。その意味で、幸田氏のような活動は、今後もっと重視されていくべきだろう。

(4) エル=ブエンテ遺跡公園

これはマヤ文明古典期後期(A.D.600年~900年)の遺跡で、日本の協力のもとに発掘調査と修復が行われ、1994年1月、コパンに次ぐホンデュラス第2の遺跡公園として開園した。

シニア協力隊員の木下氏の解説で、夕暮れ時の斜光に鮮やかに照らされる美しいマヤの神殿を見学する。こうした世界の文化



青年海外協力隊員が活動する農家(ホンデュラス)

遺産の発掘と修復という地味な仕事に、遠く離れた異国で従事される木下氏のパトスには、全く感服するばかりである。

(5) コパン遺跡見学

コパンはユカタン半島一帯に発達したマヤ文明の代表的な遺跡。A.D.700年~800年頃に最盛期を迎えたというこの遺跡。見ごたえという点では、ティオティワカンに勝るとも劣らない。後者の壮大さに対して、コパンは彫像やレリーフといった造形的表現における巧みさと芸術的精神性を特徴とする、と言えようか。

これは、「新大陸の未熟な文明」などでは決してなく、旧大陸のそれと並ぶひとつの文明なのだ、という感を強く持った。

しかし、これらの文明の直接の継承者は、少なくともこのホンデュラスではさきわめてわずかである。このことは、この地の人々のこの遺跡に対する視線をどのようなものにするのだろうか。統計によれば、マヤの末裔の先住民は、この国の全人口の6%。91%がスペイン人と先住民との混血のメスティソなのだという。

3. 研修全般を通じて

(1) メキシコの大気汚染

世界最悪の大気汚染都市メキシコシティの評は、実際に体験してみると、ふだん山形の清浄な空気に慣れているせい、私には実に耐え難いものであった。

原因は、道に溢れんばかりの大量の車である。海拔2200mの薄い空気と盆地という閉じられた系のなかでの化石燃料の大量消費という実験は、地球という閉じられた環境のなかでの資源の大量消費がもたらすものについても予見をなしている、というのは意地悪な見方であろうか。

その結論は述べるまでもない。メキシコシティを走る車の少なからぬ数が日本車であり、日産は北部に大工場を持っている、と聞くと複雑な感情にかられる。NAFTA以後の工業化路線のなかで重視されているのが自動車産業だ、と聞く時、かつて偉大な文明をつくり上げたメキシコのインテリの聡明さが、この方面でも人類史の先駆的方向へ発揮されてほしい、としみじみ思う。

(2) メキシコシティの廃棄物問題について

「都市はその廃棄物の捨て場が枯渇した時に衰亡する」というのはガボロジー（廃棄物学）の専門家の言である。人口2000万の海を持たない盆地の巨大都市メキシコシティがいかなる廃棄物処理をしているのかは、視察をするなかで膨らんできた大きな疑問のひとつであった。

夜のレセプションで、メキシコの人から断片的に聞いた話では、下水については、盆地の外の川に一次処理すら満足にされない汚水が排出されている、とのこと。しか

し、膨大な一般廃棄物や産業廃棄物がどうなっているかについては残念ながら聞くことができなかった。

(3) 貧富の差について

メキシコシティで印象的なのは、日本で言えば、銀座か六本木に匹敵するであろう繁華街ソナ＝ロサの目映いきらびやかな夜の賑わいと、そこで行き交う人々の中で赤ん坊を抱いて裸足で物乞いをする年端もいらないインディヘナ（先住民）の少女の、極端なまでのコントラストである。

早朝、シャンゼリゼを真似たというメキシコシティの大通りでは、外資系企業のビルの軒先で一夜を過ごしたと思われるインディヘナの一家が目についた。この通りの名がREFORMA（改革）であったのは、あまりの皮肉と言えようか。

また、排気ガスの異臭に満ちた渋滞する道路で花やらコーラやらを売り歩く人々の多さも印象に残っている。豊かなメキシコと貧しいメキシコ。この2つの世界を繋ぐものが、施しとかコーラ売りなどのサービス労働（？）でしかないというわけではあるまい。日本の援助も、こうした富の偏在を是正するものとなっていかなければならない。

もっとも、それは根源的にはその国の人々が担うべき課題であって、よそ者が外からあれこれ言うべき問題でもなからう。私たちにできることは、それらの歩みを妨げないということ程度なのかもしれない。

(4) 過放牧と過耕作について

ホンデュラスで気になったのは、山肌を頂まで這い上がるトウモロコシ畑や放牧地の光景である。日本の山ほど急峻ではない

にせよ、あのような傾斜地から森林を削ぎとって農耕に利用すれば、土壌浸食をまねきかねないのではないか、という疑問を強くもった。

実際、途中で浸食により崩落したと思われる山肌の無残な姿を目にした。浸食を避けるには畑地のテラス化のようなことが必要なのであろうが、そうしたことのために投資が行われているようにも思えない。浸食による農地の喪失が世界的に大問題となっている今日、この方面での協力も課題であろう。

もっとも、首都周辺の比較的平坦で条件の良いと思われる土地は、どちらかと言えば粗放で広大な放牧地として利用されていた。私には、そうした土地がトウモロコシなどの主食たる穀物の適地か否かの判断はできない。しかし、富の不平等と土地所有の偏在が、条件不適地に零細農を追いやり、そのことが森林破壊や過耕作による土壌浸食などを生み出す、という世界における環境破壊のモデル的ケースの一例にならないことを切に望むものである。

(5) 先進国の豊かさという爆弾、途上国との落差

ささやかでつましやかなテグシガルパ国際空港を飛び立ち、マイアミに着いて目にしたのは、まさに機能的に整備された現代的な大空港であった。私たちは、その「落差」に息を飲み込んだのであったが、色彩面でも計算されつくした配色で統一された快適な空港の姿は、「先進国」に降り立ったのだということをしっかりと実感させるものであった。たった2時間のフライトでこの「落差」を行き来することが、今日の「国

際化」された世界では可能なのだ。そして、この「落差」こそ、種々のグローバルな問題を生み出す根源なのかもしれない。帰国して、私たちがまず行わなければならないこと——それは開発教育の課題でもあろうが——はこうした「落差」を意識化することではなからうか。

1994年9月開催の「国際人口開発会議」から伝えられる報として、「北アメリカで生まれた子供はバングラデシュの子供の147倍、エチオピアの子供の422倍の資源を消費している」「世界の資源の85%が、人口の20%の富裕な国によって消費されており、また、世界の廃棄物、公害物質の85%が、やはりその少数の富める国から出ている」「世界人口のすべてが先進国並みの生活をすることは不可能だ、と述べて先進国の生活レベルの見直しを求める」といった記事が目につく。「先進国は豊かさという爆弾を抱えているのだ」という識者の言も思い出される。

THINK GLOBALLY, ACT LOCALLY!
とは、最近よく聞く言葉であるが、開発教育においてまず第一に問われるべきものは、私たちの豊かさと浪費的生活そのものなのではないか。

帰国後日々報じられたのは、24時間フル稼働するクーラー、飛ぶように売れるビール、そして「猛暑景気」であった。

学期が始まって目にするのは、自転車に乗りながらウォークマンに聞き入り登校する生徒たちである。

さて、どこから糸口をつけるべきなのだろう？

「共に生きる」ということ

～中国のイメージはこう変わった～



三重県立桑名北高等学校
教諭 山崎 恒哉(中国班)

1. 「目覚める獅子」

私の中国に関する認識は高いものではなく、私たちのもとに入ってくる情報の少なさ故、かえっていろいろと想像をかきたてられ、さまざまなイメージが錯綜してしまっていた。小学校の時読んだ「三国志」や、「西遊記」が中国との最初の出合いで、信義に厚く、名分を重んじ、「長江三千年」といわれる歴史を持ち、広大で未知の世界が残され、懐の深い国、という印象を強く持ち続けていた。

もう少し言うと、温帯圏に位置する国ではアメリカと並ぶ大国で、あらゆる資源の宝庫で、潜在能力を秘めた、まさに「眠れる獅子」と、ある意味では脅威を感じる国といった印象を持っていた。また、アジアの中では、欧米主導の世界圏に対して戦略的思想をしっかりと持った数少ない国のひとつであろう。

その反面、これだけ想像をかき立てられるにもかかわらず、この国を支える人々とその暮らしが、少なくとも私にはあまり見えてこない国であった。他の先生方は、いったいどのようなイメージを持っているの

だろうか。試みに、研修終了後、勤務校で教員40人に対して、中国に関するイメージを特に項目を設定せず思いのまま書いてもらうというアンケートを行ってみた(表1参照)。

アンケートを見て分かるように、政治体制の不透明さから、自由が制限されていると感じている人が少なくない。私もそう感じていた一人であった。これは1989年の天安門事件がかなり衝撃的に伝えられたことが、大きく影響しているのであろうか。

研修出発前に、「ワイルド・スワン」を読んだ。久しぶりの大作に、我を忘れて読んでしまった。中国革命を経て、「人民の国」を目指しながら、文化大革命の嵐の中を生き抜いた人々の姿を浮き彫りにして描かれている。

文化大革命や、天安門事件に加え、最近では日本への中国人密航者など話題に事欠かず、アンケートにも見られるように、抑圧された人々といったネガティブなイメージがどうしても強く支配してしまう。同時に、雄大な自然を背景に、のどか・おおらか・のんびりといったイメージも事実である。この二律背反的なギャップを埋めるべ

表1 中国に関するイメージ調査

自然	広大な土地と豊かな自然	20
	巨大な人口とそのエネルギー	15
	未知の可能性と、潜在能力	14
歴史・文化	歴史の重みと文化伝統	12
	食文化、何でも食べる	8
	お茶・陶磁器のふるさと	3
政治・経済・社会	古い体質・民主主義的でない・政治体制の不透明さ・自由が制限されている	21
	貧しい	8
	中央と地方の貧富の差	5
	開放政策・変わりつつある	5
	ゴミが多くごちゃごちゃして汚そう	5
	共産主義・人民の国	4
	多民族国家・少数民族問題	4
	一人っ子政策	3
	社会主義の崩壊・革命時のエネルギーの喪失	2
	生活は豊かではないが食うには困らない	2
	犯罪が多い	2
	現在の混乱は新しい社会の産みの苦しみ	1
	我が道を行く	1
欧米に対して世界戦略思想ができる	1	
国民性	のどか・おおらか・のんびりしている	10
	素朴	4
	勤勉	4
	忍耐強い・打たれ強い・芯の強さ	3
	中華思想	2
	ずるい・したたか	2
	商売上手	1
	つつましい	1
	オープンな人柄	1
その他	過去に対するうしろめたさ	6
	シルクロード・砂漠	5
	万里の長城	3
	人民服	2
	トイレのドアがない	2
	雪男・仙人がいそう	2
	アジアの中心	1
	もっとも日本と友好を結ぶべき国	1

(対象：教員40人、複数回答あり)



万里の長城(八達嶺)にて、石田・落合両先生

く、今回の研修に参加させていただいた。

私自身の目的は、中国の人々の生活を肌で感じる事が最も大きな狙いの一つであった。

さまざまな思いをめぐらしながらやってきた中国は、想像したとおり雄大で巨大な人口を擁する国だった。北京空港から市街へ向かう途中にあちこちに立つ市は、社会主義の崩壊したロシアとは異なり、所狭しと品物が並び、物があふれている。ものすごい活気と人々のエネルギーだ。ゴミの量も多い。私はかつて、アフリカ諸国やインドなど開発途上国を見たが、その量の多さと質が違う。やはり豊かなのだろうか。ゴミでその国の将来を占うなど、たいへん失礼ではあるが、大量消費の可能性を秘めた予感がする。

朝霧の天安門広場の大通りを、人民服姿の人々を乗せた自転車の波が埋め尽くす、そう固く信じていた私は、あまりの自動車の多さに驚嘆してしまった。もちろん、自転車の台数も破格に多い。しかし、中国は自転車天国であり、一部の権力者やお金持ちがもつごく少数の自動車は、遠慮しながら走っているというイメージはことごとく

覆されてしまった。首都北京や上海のような大都市では、既に東京も顔負けの渋滞だ。おまけにその中を縫うように、あちこちで自転車や歩行者が車道を横断している。あのテクニックと何事にも動じない人々のおおらかさに思わず感動してしまった。青信号なのに走って横断しているのは、どうやらわれわれ日本人くらいだ。それほどに車が多いとは、誰が想像したのだろうか。

街を歩いている人々は、豊富ではないにせよ、皆思い思いの服装を楽しんでいる。夏という季節のせいもあるが、ついに人民服など見かけなかった。地方の農村に行かねばお目にかかれなそうさ。大都会の夜景はとつてもきれいだ。色とりどりのネオンにイルミネーション。ホテルのロビーで、ピアグラスを傾けながら日本製の携帯電話で何やら儲け話をする青年実業家風の中国人、ダンスホールや、カラオケを楽しむ若者たち。

はて、私は今どこにいるのだろうか。

これは本当に、かつてソ連を修正主義と断罪した社会主義の雄、中国なのか。確かにイデオロギーは社会主義だが、行っている政策は資本主義社会のそれに限りなく近い感じを受けた。

決して、私はそれを批判しているのではない。むしろ、肯定的にとらえているのだ。

人々の表情は屈託がなく、自由にあふれている。サングラスにミニスカートで最新式の自転車にまたがり、颯爽と駆け抜ける小娘。

「中国は変わった」、と現地ガイドが言った。1989年の天安門事件以来開放政策を進め、特にここ2～3年で大きく変わったら

しい。しかし、めざましい変革を喜んでばかりいられないようだ。人々はお金儲けに走り、街の治安も悪くなったという。大都会に高層ビルがどんどん建設されると、かつて住んでいた町を追われる人々がいる。大都会と地方農村との経済格差。さまざまな問題が、押し寄せてくると言う。

どれもこれも、かつて日本が通った道であり、新しい国家への産みの苦しみののだろう。

広大な中国を、たかだか10日間の滞在で語ることはもとより不可能だが、人々の表情から、ネガティブなイメージが自分のなかで完全に払拭され、躍進しつつある中国のバイタリティを肌で感じた訪問研修だった。



天壇公園にて

2. 「共に生きる」ということ

国際協力事業団の組織は以前から知っていたが、具体的な活動となると、どのようなことを行っているのかは、観念的にしかとらえていなかった。医療技術・農業技術援助や、ダム建設、造船技術移転など、今回、実際に協力活動現場を視察して、言葉では表現できないほどの感動を受けた。

それは、単に日本のお金がどのように技術援助という形で使われているかを言っているのではなく、日本から派遣された青年海外協力隊の人々や、国際協力事業団派遣の専門家の方々の献身的な姿を目の当たりにしたからだ。若い、協力隊員の活躍もさることながら、もっと感銘を受けたのは、各プロジェクトで活躍される専門家の方々の姿だった。

日本では第一線で活躍された方々ばかりで、失礼ながら専門家の皆様の年齢を考えると、もし日本に居られるならば、大役を終えられて第二の人生を悠々自適で過ごせるにもかかわらず、異国の地でさらに自らの技術を伝えようとされるその心意気に胸が熱くなる思いでいっぱいだった。皆様のお話をうかがって、中国のためにささやかながら努力したいとおっしゃるその言葉に、自信と使命感を強く感じた。

それに引き換え、いったい自分には何ができるのかと、考えさせられてしまった。私がささやかながらできることは、とにかくこの感動を早くみんなに伝えることしかない。それによって、協力隊員や、専門家となって、開発途上国に貢献できる生徒が将来現れてくれれば、と願わざるを得ない。

「外国への援助も大切だが、たくさんの税金を外国に使う前にもっと日本国民のために使え」という声も聞くが、今回、中国を見て、私は直接見たわけではないが、昭和20～30年代の日本が頭に浮かんだ。今の中国は、日本がかつて通った道なのだろう。大げさかもしれないが、協力隊員や、専門家の人々が現地で「共に生きる」姿を見て、すべての国々の、すべての人々の幸福が、地球上の人々の幸福であると、心から感じられた。

3. 開発教育にかかると 私たちの使命

私の専門は地理なので、今回視察したプロジェクトは、授業に利用できると考えている。総じて言うならば、技術協力は単なる技術移転にとどまらず、被援助国の自助努力を伴わなければ、成功しない。そのためには技術協力は短期間ではなく長い目で行わなければならない。先端機械をどれだけ供与したかよりも今後その国を担っていく人材の養成に力を入れていくことが肝要である。アフリカの言葉に、「空腹の時、魚

を釣って与えてくれた人の恩はやがて忘れてしまうが、魚の取り方を教えてくれた人の恩は、一生忘れない」という言葉があったと記憶している。まさにこの点である。

どの国もそうであるように、医療の問題にしても端緒にとりかかったばかりで、全体の社会の底上げにつなげられなければ全体に対する還元にはならない。ここに主眼が置かれていることが、今回の視察で協力隊員や専門家の人々の姿勢からよく窺えたと思う。これを何とかして授業だけでなく折に触れて伝えていきたい。各プロジェクトについて、今この場で個別に触れることは避けるが、これらがいずれはその国全体の底上げに通ずること、さらに被援助国の生活向上が、やがては先進国と呼ばれる国の人々の幸福につながるという連鎖をきちんと理解させたいと考えている。

また、前掲表1のアンケートに見られるようにネガティブな面が支配的であることには、多分に先入観が手伝っているのも事実である。したがって、実際に自分が見て感じた中国を、私なりに伝えることも重要な課題だということができよう。

第4章

平成6年度 高校教師海外研修資料

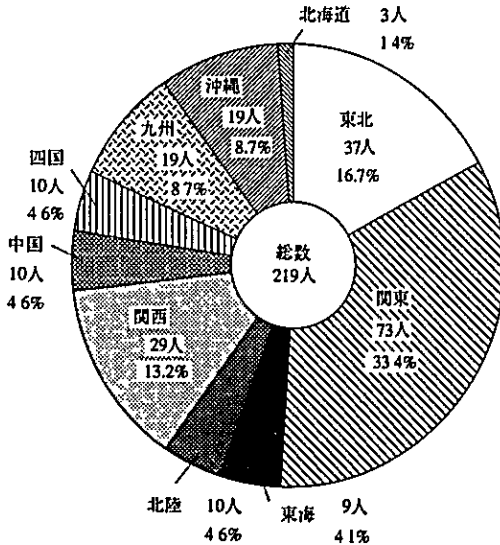
1. 募集概要

募集期間：平成6年2月14日～3月31日

応募総数：219人

協力機関：全国高等学校国際教育研究協議会

支部別応募状況



2. 事前研修とその内容

(1) 支部研修

実施時期：平成6年6月～7月上旬

実施場所：国際協力事業団各国内支部・
沖縄国際センター

研修内容：①開発途上国の現状と課題
②ODAとJICAについて

(2) 事前研修

実施時期：平成6年7月25日～26日

実施場所：東京国際研修センター

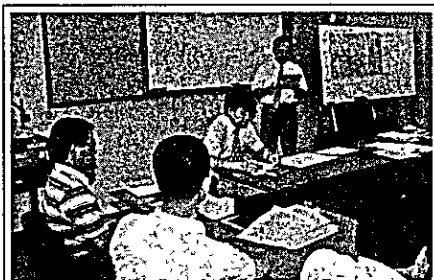
事前研修日程

1日目〈7月25日(月)〉

時間	内容
15:00～15:05	開講挨拶
15:05～15:20	海外研修参加にあたって (高国協事務局長・ 矢田部正照先生)
15:20～16:00	JICA事業説明と高校 教師海外研修について
16:15～18:00	コース別研修 ①日程説明 ②自己紹介 (開発教育等との関 わり・本研修参加の 抱負等) ③開発教育についての 討論会 (p.80～p.85)

2日目〈7月26日(火)〉

時間	内容
9:00~12:00	学校の授業における開発教育の方法論 (p.75(3)参照)
13:30~14:30	平成5年度の高校教師海外研修参加者による開発教育の実践事例発表 (インドネシア研修参加 神奈川県立商工高校 遠藤晋先生)
14:30~17:30	コース別研修 ①渡航手続等説明 ②やさしい語学講座 (右写真上から、スワヒリ語、スペイン語、中国語)



18:30~20:00 団結式

(3) 「学校の授業における開発教育の方法論」の講義内容

講師 国際理解教育・資料情報センター(ERIC) 角田尚子事務局長

1. カクテルパーティー

自己紹介ゲーム等の雰囲気作り

2. 共有物の悲劇—クロマグロの事例

(1) 目標

共有物(Commons)とは、誰が管理するものでもないし、誰が利用しても構わないものを指すが、共有物の量は



通常限られているため、早い者勝ちによってすぐに失われていく。このゲームは、クロマグロのような共有物を絶滅させずに持続管理していくためには、どうすればいいかを、自己の感情に即して理解するためのものであり、また、捕獲規制のような国際的な問題を解決するためにも人間の倫理観が必要なことを理解させることを目標とする。

(2) 人数・準備するもの

25～40人

クロマグロと船のカード (数は人数に従って調整する)

クロマグロのカード				
サイズ	用意するもの	構成比	価格比	成長
大	10	1	1万円	大1から小100匹
中	50	5	1000円	中5が大1に
小	100	10	10円	小10が中1に

クロマグロの年齢構成に従って、数を調整するが、サイズは、画用紙半分の大きさで大を、画用紙4分の1の大きさで中を、画用紙1枚から小を20枚ほど作る。

クロマグロの数を増やせばよい (たとえば、4隻から始めて、儲けの多かったグループには船の増船を許可して8隻ほどまで増やすことができる)。

この構成でいくと、全体の水揚げ高は15万円になる。4隻が出漁すれば、最低4万円の収入を上げる必要があるという設定にする (実際の遠洋漁業には、300トンほどの船で最低1億円は費用がかかる)。

(3) 所要時間目安

40分～1時間

(4) 進行方法

1チーム5～10人の5チーム構成で実施するため、グループを作ってもらい、「船」のカードを各グループに配る。床に広げた「クロマグロ」を自由に釣らせる (取らせる)。「クロマグロ」の水揚げに応じて、「船」を配り直す (たとえば、水揚げが1番だったグループに、1隻増やす等)。

また、自由に釣らせ、この時点ではほとんど取りつくしてしまったが、魚がいなくなってしまうと、次の年には取れないことに気づかせ、そのようにならないためには



どうすればいいのだろうか考えさせる。

→国際漁業委員会を招集して、船の数や捕獲の期間や量の規制などを話し合わせてみる。

(5) 参加者への問いかけ

気づいたことを言ってもらい、自分たちが関与するように働きかけ、現状について目を向け、関与させる必要があることを気づかせる。

(6) 最後に

開発教育を実践するに当たって、ロールプレイを実施することは非常に効果的である。ロールプレイで日常慣れ親しんだ役割以上の新しい役割を呼び起こし、役割を演じることを通じて、①他人の状況を理解し、共感する能力を育み、②意思決定能力を育み、③コミュニケーションの技能、対人関係を育み、④態度を変容させ、⑤自己への気づきを達成させることを目指している。

3. マグロからツナ缶まで

(1) 目標

マグロは多くの経緯を経てツナ缶になるが、マグロという原材料を缶詰に加工していく過程を、参加者の一人一人が労働者として完成させていく。それによって、加工にかかわる社会資本を含めた必要条件や先進国と開発途上国の問題を気づいてもらうことを目標とする。

(2) 人数・準備するもの

30~40人、ツナ缶1つ

(3) 所要時間目安

30分

(4) 進行方法

進行役はツナ缶を手に取り、マグロの漁獲から消費者の手に届くまで、順番にどのような仕事があるか全員に問いかける。

『マグロを捕まえるのに、何か必要でしょうか』と問いかけて、誰かが「漁船」「船」といったら、その人を漁船や船の持ち主にして列をつくり始める。

一人がひとつの仕事をして生産から流通、消費までの全体の流れを作る。一人一人の仕事が資源とエネルギーの消費を表す。マグロを加工してツナ缶にするまでには、下記のような過程があるが、その際、進行役は、缶詰の実物は必ず用意し、そこに何が原材料として含まれているか説明書を読むようにする。

これは、加工品の原材料を確認するという消費者教育につながる。

缶詰の実際の値段を支払い、それぞれがどれほどお金を受け取っているかを見ていくと、マグロの漁獲に携わる人の取り分がいかに少ないかが実感できる。

マグロ漁獲 マグロ水揚げ マグロの保存 加工工場への 運搬	冷凍能力を持った漁船・燃料・漁具 港湾・運搬作業用機械・冷蔵庫あるいは冷凍能力のあるトラック 冷凍倉庫 缶（ラベルやインクなどにも注意） マグロ以外の材料・加工機械・エネルギー さらに食缶については缶工場から製鉄工場や鉄鉱石の鉱山までの存在がある。（注意：これまで利用してきた機械類についても同じことであるが、缶詰という実物に即してだけに限定する）
出荷 販売	段ボール・輸送用トラック・燃料・整備された道路網 店舗・値札・レジ等

(5) 参加者への問いかけ

開発途上国では、どのような過程を経て、魚が消費されているかを考える。

→参加者を1人残しておいて、その人にいくつかの質問を投げかけてみることで参加者全員で考えてみる。

→途上国では、小さな漁船で出かけて行って、捕ってきた魚を地元の市場で売るという流れしかないが、これが途上国の資本のすべてだ。

→そこで、「日本は高い値段でマグロを買うそうだから、日本に売ろうよ」と持ちかける。冷凍設備が必要、国内及び国外とも輸送手段と道路が必要。

→まずは多大な社会資本整備から始めなければならない。

→どこにそんなお金があるのか？ 途上国が軒並み借金に苦しんでいるのはそのためだということを体験させる。

(6) 最後に

このワークショップは、ひとつの正解があるわけではなく、参加者が途上国の大変さに気づき、関心を持つことにつながり、みんなで考えることをしなければ「出口はない」ということを認識させる。

4. ウーリーウェブ～開発教育問題のつながり～

(1) 目標

開発教育の問題は複雑に絡み合っていることを、頭だけでなくからだをとおして理解することを目標とする。

(2) 人数・準備するもの

30人以上（10人以上なら実施可能、その場合は2人組にする）

各グループ模造紙1枚と毛糸玉（すべて違う色）を10個ほど

(3) 所要時間目安

20～40分

(4) 進行方法

3～4人一組のグループを10つ作り、各グループに模造紙を配り、それぞれの開発教育の問題が他の問題とどのようなつながりを持っているかを考えることが活動の目的であると告げる。

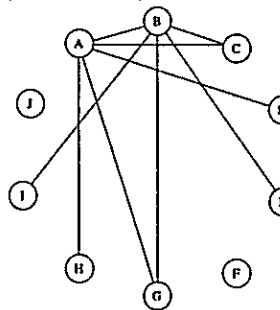


たとえば、開発教育の問題点で何を生徒に伝えるべきかということ各グループで話し合い、参加者から10出してもらったうえで、いくつかのグループにどのようなことか発表してもらう。

そのなかから、開発教育の問題点として10項目を選び出し、自分がどの問題をいちばん生徒に伝えたいかでグループを作ってもらい、グループごとにかたまるとして1つの大きな輪になってもらう。各グループに毛糸玉を1つずつ配り(毛糸の色はすべて異なる)、各グループで代表2人を選ぶ。

図1のように、起点となる人(A)の腰に毛糸玉を持って、自分たちが担当する開発教育とのつながりのある他の開発教育を担当するグループへ行き、どんなつながりがあるかを説明する。「確かにつながりがある」と合意が成立した場合は、そのグループ

図1 ウーリーウェブ模式図



の起点となる人(B)の腰に毛糸を巻きつけて、自分のグループに戻り、再びAの腰に毛糸を巻きつけて、次につながりのあると思われる開発教育問題のところに交渉に行く。各グループともこれを繰り返す。

(5) 参加者への問いかけ

交渉がすべて終了したら、そのままの状態でのどのような模様ができたのか、じっくり観察してみる(たとえば、A「南北問題」のところに毛糸が特に多く集まっていれば、開発教育の問題点は南北問題の認識が大切なことが分かる。あるいは全体の模様がとても複雑なので、開発教育は複数の問題が複雑に絡み合っているの、実施も困難であることが分かる)。

(6) 最後に

毛糸を切らないように、ていねいにはどきながら、後片づけをして、実際の開発教育問題の解決の困難さを味わってみる。

(4) 開発教育についての討論会

ケニア班：1	参加者：藤井・佐藤・玉置・梶原・伊井
<p>1) 開発教育を“なぜ”実践しているか</p> <ul style="list-style-type: none">・途上国の経験から、何が豊かさであるかを考えるために。・国際化のためにどうしても学ぶ必要がある（※国際化とは日本人と世界の人たちが信頼し合えること）。・生徒が途上国を理解し、何ができるかを考えさせる。・エッセイコンテスト参加の動機づけ。 <p>2) 開発教育において“何を・どのように”実践しているか</p> <ul style="list-style-type: none">・授業の中で海外へ行った人の話を聞かせる（途上国に関するニュースの紹介。途上国に関する特設授業）。・文化祭でパネル展（JICA製）、途上国の食文化研究。・講演会で青年海外協力隊のOB・OGの話を聞く（JICA支部の人、在日外国人の話を聞く）。・クラブ活動で途上国の料理を作る。・エッセイコンテスト入選者の報告会。 <p>3) 開発教育を実践するに当たって“何が”いちばん大切だと思うか</p> <ul style="list-style-type: none">・途上国の人たちから教えられるものを大切に（先進国、途上国の類型分けではなく、共に生きる視点）。・途上国の人たちの気持ち、心をつかむことが大切（かわいそうだから……ではなく自立の基盤づくりを）。・国際化とは、さまざまな国の人たちのさまざまな違いを理解したうえで、人間としての共通性を認識し合うことだと考える。その視点から、何が真に豊かなのか考えていく。 <p>4) 開発教育への願い（先生が生徒に対して何を伝えたいか）</p> <ul style="list-style-type: none">・地球市民として共に生きる姿勢（自分たちの生活のよさを客観化できる視点）。・援助の視点だけでなく、それぞれの民族が誇りとしているものを見る視点。	

ケニア班：2 参加者：出村・與崎・北村・友光・斎藤

1) 開発教育を“なぜ”実践しているか

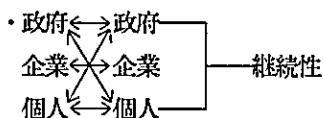
- ・途上国の犠牲を考える。
- ・共生 (co-existence) “共に生きる”—自立。
- ・相互依存 (interdependence)。
- ・自己と途上国との関わり—relations。

2) 開発教育において“何を・どのように”実践しているか

- ・ビデオ、スライド。
 - 「生」を見つめる—life。
 - 抽象→具体
 - ・(疑似体験)
 - ・ロールプレイ。
- 生きた人格との交わり
※教室に「外国人」を招き、
生徒とのふれあいを持つ。

3) 開発教育を実践するに当たって“何が”いちばん大切だと思うか

- ・知識、態度、技術。
- ・顔が見える理解。
- ・person-to-person



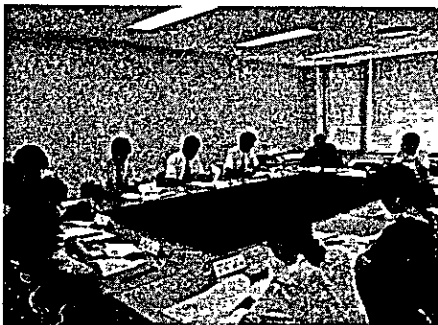
4) 開発教育への願い (先生が生徒に対して何を伝えたいか)

- ・生命・人権・環境・生活
- 共生
-



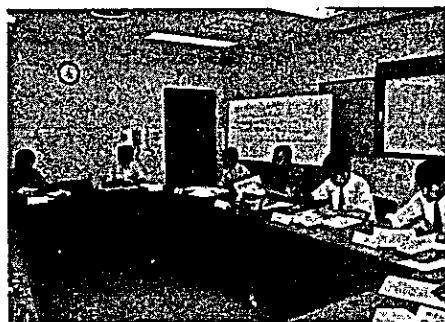
中米班：I	参加者：島上・高田・岡村・久貝・根岸
<p>1) 開発教育を“なぜ”実践しているか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語教師として、外の世界に目を向けていく必要あり。 ・フィリピンで、スモークマウンテンの上に立った時、「同じ人間としてこれで良いのか!?’という疑問から。 ・援助の意味を認識させることで、差別や偏見をなくす。 ・「第三世界の犠牲の上に、先進国がある」という点から、生徒にアプローチ。 <p>2) 開発教育において“何を・どのように”実践しているか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化祭で講演（JICAや青年海外協力隊のOB・OG）。 ・募金活動。 ・国際理解弁論大会参加。 ・授業で青年海外協力隊のスライドや映画を見せる。 ・授業で実物教材（バナナ、エビ）を使う。 ・マンガODA物語。 ・クラスでLHRでフォスタープランに参加。 ・エッセイコンテスト参加（入選した!?)。 <p>3) 開発教育を実践するに当たって“何が”いちばん大切だと思うか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報の扱い、集め方など。 ・主体的な子供の興味を喚起すること。 ・子供たちが持った興味や知識が悲観的な方向に向くのを避けつつ、そのような芽をつぶさないような一貫性のある科学的な指導法。 ・生活水準や環境が違っても、そこに「人間」が「生きて」おり、その人々の「生きる権利」をどのように守っていけば良いのか、考える大切さを伝える。 ・個性、文化の違いを認めることのできる人格を育てる。 ・日本人としてだけでなくアジア人、地球人としての視点から、世界が互いに依存し合わなければ成り立たないのだという現実の重要性を認識させること。 <p>4) 開発教育への願い（先生が生徒に対して何を伝えたいか）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主体的な努力の積み重ねを当事者として行う人間になってほしい。 ・「遠い」に対する寛容、受容の態度を身につけてほしい。 ・傍観者であってはならない、批判を受けても失敗してもよい、経験を積むことが大切である。当事者たれ。 ・ポーターレス時代の担い手たれ、外からの視点を持って行動できるように。 ・指示待ち人間ではなく、自分の考えを持って行動できるポーターレス時代の主役たれ。 	

中米班：2	参加者：阿部・大沼・絵面・黒川・松田
<p>1) 開発教育を“なぜ”実践しているか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・途上国に対する偏見をなくす。 ・途上国のことをよく知る。 ・飢餓、南北問題を考える。 ・世界の中の日本の位置を理解する。 <p>2) 開発教育において“何を・どのように”実践しているか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業のなかで途上国の歴史や問題、文化などを教える。 ・生徒会活動で募金などの奉仕活動を行う。 ・協力隊員の講演会や留学生との交流会を行う。 <p>3) 開発教育を実践するに当たって“何が”いちばん大切だと思うか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化の独自性、多様性を理解する。 ・相手のことをよく知る。相手の立場になって考える。 ・“援助してあげる”というのではなく、自分たちと途上国の関わりを把握したうえで、何をすべきか、何をしてはいけないのかを考える。 ・日本人は金持ちだから援助するという優越感ではなく、自分の生活と途上国との関わりのなかで価値観を変える。 <p>4) 開発教育への願い（先生が生徒に対して何を伝えたいか）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分に何ができるかを自発的に考えて行動する。 ・自分で見たもの、自分の体験を伝えたい。 	



中国班：I	参加者：生駒・鈴得・石田・落合
<p>1) 開発教育を“なぜ”実践しているか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人類の未来のため。 ・相互理解。 ・相互扶助。 ・異文化理解。 ・固定観念を打破する。 <p>2) 開発教育において“何を・どのように”実践しているか</p> <p>(学校行事で)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化祭でビデオ、パネル展、講演(体験談)、研修員との交流会。 ・修学旅行。 <p>(授業で)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・HRで。 ・教科指導で。 <p>(部活動で)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(例)国際研究クラブ。 <p>(その他)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生レベルでの生徒交換留学。 <p>3) 開発教育を実践するに当たって“何が”いちばん大切だと思うか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな国とも対等な立場で。 ・次のステップへの見通しを持つ。 ・教員自身の実体験。 <p>4) 開発教育への願い(先生が生徒に対して何を伝えたいか)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・具体的実践のできる生徒の育成。 ・世界の平和。 	

中国班：2	参加者：保木本・山崎・吉村・福士・森
<p>1) 開発教育を“なぜ”実践しているか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他人を幸福にすることが自分の幸福である。 ・開発＝実際の開発＋心の開発 ・相互理解と文化（日本）の伝承・見直し。 <p>2) 開発教育において“何を・どのように”実践しているか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(例)中国人研修生(農業技術)との交流（スポーツ、華道、茶道、中国語等）。 ・修学旅行を通じた生の交流。 ・学園祭における部・クラブ等の発表（青年海外協力隊OBによる体験発表）。 <p>3) 開発教育を実践するに当たって“何が”いちばん大切だと思うか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒に“生の体験”の機会を！ →エッセイコンテスト入選の海外旅行や修学旅行。 ・教師自身が体験の幅を持つこと。 →力量をつける。 <p>4) 開発教育への願い（先生が生徒に対して何を伝えたいか）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・援助は“物質”もそうだが、むしろ“心”だ。 	



3. コース別日程／参加者氏名

<ケニア班>

月日(曜)	午 前	午 後
7.27(水)	11:55 成田発	17:40 チューリッヒ着 20:40 チューリッヒ発
7.28(木)	5:15 ナイロビ着 6:30 ホテルチェックイン・日程打ち合わせ等	16:00 JICA事務所訪問 18:30 事務所主催夕食会
7.29(金)	11:30～16:00 セントラル州の青年海外協力隊員(理数科教師)訪問 (教育省キアンガイ・セカンダリースクール)、 周辺農家視察	
7.30(土)	10:00 ホテル発	アバディア国立公園視察
7.31(日)		ナイロビ博物館見学
8.1(月)	11:00～15:00 社会林業訓練計画プロジェクト(SFTP)視察 19:00～ 専門家・カウンターパートとの懇親会	
8.2(火)	9:00～12:00 SFTP周辺村落視察 (NGO活動現場視察等)	14:00 SFTP発 16:00 ナイロビ着
8.3(水)	10:00～12:00 NYS技術学院プロジェクト視察・プロジェクト関係者との懇談会	ナイロビ市内視察
8.4(木)	10:55 ナイロビ発	17:45 チューリッヒ着
8.5(金)		12:50 チューリッヒ発
8.6(土)	7:50 成田着	

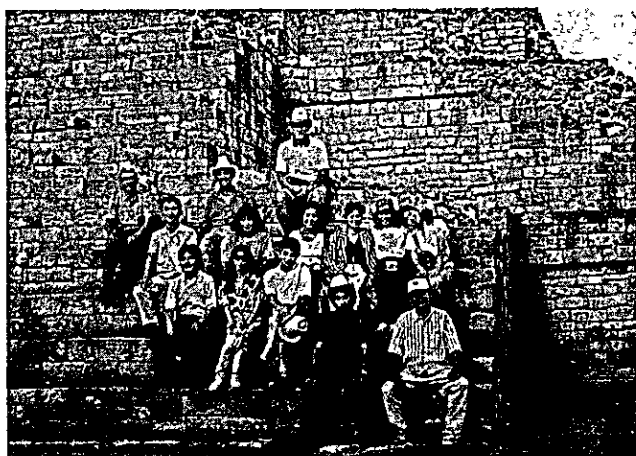
氏名	所属学校名 所在地	担当教科
藤井 洋治	岩手県立一関農業高等学校 021 岩手県一関市赤荻字清水33	社会
斎藤 明人	静岡市立高等学校 420 静岡県静岡市千代田3-1-1	社会
佐藤 鉄郎	東京都立千歳高等学校 157 東京都世田谷区粕谷3-8-1	社会
友光 俊一	東京都立農業高等学校 183 東京都府中市寿町1-11	農業
玉置 啓二	岐阜県立各務原高等学校 502 岐阜県各務原市蘇原新生町2-63	英語
出村 豊	石川県立七尾農業高等学校 926 石川県七尾市戊部下町12-6	農業
伊井直比呂	国立大阪教育大学付属高等学校 池田校舎 563 大阪府池田市緑ヶ丘1-5-1	社会
北村 秀人	就実高等学校 700 岡山県岡山市弓之町14-23	社会
梶原 武	鹿児島県立鹿児島西高等学校 890 鹿児島県鹿児島市下伊敷44-4	社会
奥崎 安喜	沖縄県立那覇西高等学校 900 沖縄県那覇市字金城180	国語



< 中米班 >

月日(曜)	午 前	午 後
7.27(水)		17:55 成田発(日本時間) 15:25 タラス着 18:40 タラス発 20:15 メキシコ着
7.28(木)	10:15 ホテル発 10:30 JICA事務所訪問・打ち合わせ 12:00 大使館表敬	15:30 教育テレビ 研修センター・プロジェクト(CETE)視察
7.29(金)	10:00 ホテル発 10:30 日墨学院(LICEO)訪問	15:00 地震防災センター(CENAPRED)訪問
7.30(土)	10:00 ホテル発 11:00 ティオティワカン遺跡視察	メキシコ市内視察
7.31(日)	11:30 ホテル発	13:30 メキシコ発 17:45 テグシガルパ着 19:30 事務所との打ち合わせ
8.1(月)	8:50 ホテル発 9:00 JICA事務所訪問・打ち合わせ 10:30 大使館表敬	14:00 国立教育実践研究所(INICE) (無償+協力隊+専門家) 15:00 ホンデュラス工業高校訪問 (隊員活動視察)
8.2(火)	8:15 ホテル発	14:00 エル・プエンテ遺跡公園視察 (隊員活動視察) 16:30 ホテル着
8.3(水)	8:00 ホテル発 コパン遺跡視察 11:00 ホンデュラス・アレマン工業高校(隊員活動視察)	14:00 ホンデュラス・アレマン工業高校発 18:00 テグシガルパ着
8.4(木)	8:30 ホテル発 市内見学 11:00 空港着	13:00 テグシガルパ発 17:24 マイアミ着
8.5(金)	7:40 マイアミ発	
8.6(土)		15:10 成田着

氏名	所属学校名 所在地	担当教科
阿部 和彦	仙台白百合学園高等学校 980 宮城県仙台市青葉区本町1-7-1	社会
大沼 佳明	山形県立天童高等学校 994 山形県天童市大字山元850	社会
絵面 照子	栃木県立宇都宮白楊高等学校 321 栃木県宇都宮市今泉町2021	英語
根岸 範子	栃木県立黒磯高等学校 325 栃木県黒磯市豊町6-1	英語
黒川 仁紀	千葉県立成田国際高等学校 286 千葉県成田市加良部3-16	社会
松田 直子	富山県立雄峰高等学校 930 富山県富山市赤江町1-45	英語
島上 逸雄	小林聖心女子学院高等学校 665 兵庫県宝塚市塔の町3-113	社会
高田 義弘	徳島県立鳴門高等学校 772 徳島県鳴門市撫養町斎田字岩崎135-1	英語
岡村 俊弘	長崎県立大村園芸高等学校 856 長崎県大村市久原1-416	社会
久貝 磯野	沖縄県立読谷高等学校 904-03 沖縄県読谷村字伊良皆198	社会



< 中国班 >

月日(曜)	午 前	午 後
7.27(水)	10:00 成田発	13:15 北京着 16:30 JICA事務所訪問・事業紹介 20:00 ホテル着
7.28(木)	7:30 ホテル発 9:00 リハビリセンター視察 11:00 北京蔬菜研究センター視察	13:30 青年海外協力隊員活動視察 (野菜) 15:30 天壇公園見学 19:30 京劇鑑賞(前門飯店梨園劇場) 21:30 ホテル着
7.29(金)	8:30 ホテル発 天津へ	13:00 青年海外協力隊員活動視察 (果樹) 14:00 天津発 20:30 ホテル着
7.30(土)	9:00 ホテル発 10:00 青年海外協力隊員活動視察 (中日友好病院)	13:00 故宮・天安門・白塔寺付近胡同 見学 20:30 ホテル着
7.31(日)	7:30 ホテル発 10:00 万里の長城見学	明の十三陵見学 20:30 ホテル着
8.1(月)	9:00 ホテル発 11:00 灌漑排水技術開発訓練センター 視察	自由市場見学 20:00 ホテル着
8.2(火)	7:20 北京発 9:50 福州着	14:00 福建林業開発計画視察 20:30 ホテル着
8.3(水)	9:00 ホテルチェックアウト 9:30 個別専門家活動視察 (船舶設計)	14:00 市内見学 19:40 福州発 20:50 上海着
8.4(木)	9:00 ホテル発 10:00 上海現代金型技術訓練センター 視察	14:00 豫園・浦東新区見学 18:00 夕食、黄浦江夜景遊覧 21:30 ホテル着
8.5(金)	9:00 ホテルチェックアウト 10:00 自由時間(南京路)	14:15 上海発 18:00 成田着

氏名	所属学校名 所在地	担当教科
保木本敬一	北海道留寿都高等学校 048-17 北海道虻田郡留寿都村字留寿都179-1	農業
石田 重洋	北海道深川農業高等学校 074 北海道深川市一己町字一己633-1	農業
福士 諭	松風塾高等学校 039-33 青森県東津軽郡平内町大字外童子字滝の沢37	理科
鈴得 涉	埼玉県立川越農業高等学校 350 埼玉県川越市小仙波町5-14	農業
山崎 恒哉	三重県立桑名北高等学校 511 三重県桑名市大字下深谷部字山王2527	社会
生駒七三男	神戸市立神戸工業高等学校 654-01 兵庫県神戸市須磨区西落合1-1-5	工業
吉村 泰典	大阪府立枚方高等学校 573-01 大阪府枚方市津田北町2-50-1	数学
村岡 章	山口県立奈古高等学校 759-36 山口県阿武郡阿武町奈古	農業
森 昭彦	愛媛県立丹原高等学校 791-05 愛媛県周桑郡丹原町大字願連寺163	社会
落合 弘	大分県立大分上野丘高等学校 870 大分県大分市上野丘2-10-1	社会



4. 開発教育参考資料

開発教育や開発問題について、もっと詳しく知りたい方々のために、開発教育を実施している団体や、教材として役立ちそうな教材/素材をリストアップしてみました。国際協力事業団（JICA）刊行のものは、各支部にお問い合わせください。

(1) 開発教育関係NGO・団体

機関名	所在地	活動*
国際理解教育・ 資料情報センター (ERIC)	〒114 東京都北区北田端1-14-1岩瀬ビル TEL03(3800)4415 FAX03(3800)0550	①～⑤、 ⑥施設利用、カリキュラム開発等
開発教育協議会	〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-18-61 TEL03(3207)8085 FAX03(3207)0226	①～③、⑤、 ⑥開発教育情報センター開館
財団法人 国際協力推進協会 (APIC)	〒106 東京都港区南麻布5-2-32 第32興和ビル TEL03(5423)0571 FAX03(5423)0576	①～③、 ⑥国際協力プラザ開館
社団法人 協力隊を育てる会	〒160 東京都新宿区霞ヶ丘町15 日本青年館内 TEL03(3402)2153 FAX03(3402)3263	①～③、⑤、 ⑥小さなハートプロジェクト

(2) 国際協力NGO団体の開発教育

機関名	所在地	活動*
NGO活動推進センター (JANIC)	〒101 東京都千代田区神田錦町2-9-1 斉藤ビル5階 TEL03(3294)5370 FAX03(3294)5398	①～③、⑤、 ⑥NGO活動推進センター資料室開館
シャプラニール＝市民 による海外協力の会	〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-1 早稲田奉仕園スコットホール内 TEL03(3202)7863 FAX03(3202)4593	①～⑤、 ⑥作文・小論文コンクール、パングラデシュ製品輸入販売
曹洞宗国際ボランティア会(SVA)	〒170 東京都豊島区巢鴨1-28-5 ヒカリビル202号 TEL03(3945)0981 FAX03(3942)7900	①～⑤、 ⑥図書館開館
財団法人 日本ユニセフ協会 (ユニセフ日本委員会)	〒160 東京都新宿区大京町31-10 第一大京ビル TEL03(3355)3221 FAX03(3355)3810	①～③、 ⑥図書館開館
社団法人 日本ユネスコ協会連盟 (日ユ協連)	〒150 東京都渋谷区恵比寿1-3-1 朝日生命恵比寿ビル12階 TEL03(5424)1121 FAX03(5424)1126	①～⑤、 ⑥ユネスコ広報センター開館

*①セミナー開催②講師の派遣③資料の収集・開発・提供④スタディツアー⑤機関誌の刊行⑥その他

(3) 開発教育教材／素材

分類	タイトル	内 容	問い合わせ先	備考
本・冊子・パンフレット	開発教育ダイレクトリー'94	日本の開発教育を進める団体の活動を紹介した冊子	開発教育協議会 TEL03(3207)8085	有料
	開発教育ハンドブック	各種開発教育実践例を紹介した冊子		
	ワールドスタディーズ ～学び方・教え方ハンドブック	国際理解教育のさまざまな事例を説明した本	ERIC TEL03(3800)4415	有料
	フードファーストカリキュラム ～食べ物を通して世界を見つめよう	身の回りの「食」を通して世界とのつながりを説明した本		
	開発教育実践の手引き	開発教育の実践例を掲載した冊子	APIC TEL03(5423)0571	有料
	国際理解教育展開事例集	国際交流・帰国子女教育・科目別国際理解教育の事例を紹介した本	一橋出版 発行 TEL03(3392)6021	有料
	南北問題と開発教育	南北問題とは何か、開発教育とは何かを解説した本	田中治彦 著 亜紀書房 発行 TEL03(5280)0261	有料
	21世紀 ぼくらの約束	途上国の現状とODA、JICAについて解説したパンフレット	JICA各国内支部 (p.94、p.95参照)	無料
ビデオ・スライド	地球の仲間たち(Part I、II)	途上国の人々と日本人の暮らしを「服装」「食べる」「子供たちの生活」等の面から紹介したスライド	協力隊を育てる会 TEL03(3402)2153	貸出 無料
	開発教育キット (Part 1～4)	途上国の児童画スライド(Part 1) 「動くアジア」スライド(Part 2) 「アジアのうねり」ビデオ(Part 3) 「アフリカ大好き」ビデオ(Part 4) スライド・ビデオと教師用シナリオがセットになった開発教育用の教材	APIC TEL03(5423)0571	貸出 無料
	開発途上国ってどんな国？ ～小さな友情から大きな夢へ～	日本人の少年が途上国を訪れ、現地の生活の困難さを目の当たりにし、途上国を認識していくアニメーションビデオ	外務省 TEL03(3580)3311	貸出 無料

分類	タイトル	内 容	問い合わせ先	備考
ビデオ・スライド	約束 ～アフリカの水と緑～	日本人の少年とアフリカの遊牧民の子供との友情を描くアニメーションビデオ	JICA各国内支部 (p.94、p.95参照)	貸出 無料
	地球の明日を見つめて ～JICAは今～	エジプト、バングラデシュ、パラグアイの援助を通じて、技術協力の意義、役割を紹介		貸出 無料
定期刊行物	国際協力	途上国の現状やJICA事業に関するさまざまな情報を取り扱ったJICAの広報誌(月刊)	JICA広報課 (p.94、p.95参照)	有料 ¥500
	国際開発ジャーナル	ODAと国際協力の系統的情報を網羅するわが国唯一の専門月刊誌(月刊)	国際開発ジャーナル社 TEL03(3584)2191	有料 ¥850
	国際協力プラザ	国内外の国際協力に関わる情報を、一般市民向けに分かりやすく掲載している情報誌(月刊)	APIC TEL03(5423)0571	有料 ¥500

(4) JICA各問い合わせ先

本部

〒163-04 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル46階

総務部広報課

TEL 03-3346-5029 FAX 03-3346-5032

北海道支部

〒060 北海道札幌市北区北7条西5丁目7-1

札幌北スカイビル7階

TEL 011(756)6333(代)

FAX 011(756)7267

関東支部

〒336 埼玉県浦和市北浦和4-5-5

北浦和大栄ビル7階

TEL 048(834)7770(代)

FAX 048(834)7775

東北支部

〒980 宮城県仙台市青葉区一番町4-6-1

仙台第一生命タワービル15階

TEL 022(223)5151(代)

FAX 022(227)3090

東海支部

〒460 愛知県名古屋市中区丸の内2-4-7

愛知県産業貿易館西館8階

TEL 052(221)7103(代)

FAX 052(201)9516

北陸支部

〒920 石川県金沢市広岡3-1-1
金沢パークビル9階

TEL 0762(33)5931(代)

FAX 0762(33)5959

四国支部

〒760 香川県高松市亀井町5-1
百十四ビル13階

TEL 0878(33)0901(代)

FAX 0878(37)0747

関西支部

〒530 大阪府大阪市北区堂島2-2-2
近鉄堂島ビル14階

TEL 06(345)3621(代)

FAX 06(345)3616

九州支部

〒812 福岡県福岡市博多区博多駅前2-9-28
福岡商工会議所ビル8階

TEL 092(451)3380(代)

FAX 092(474)1665

中国支部

〒730 広島県広島市中区紙屋町1-2-29
安田火災・富士銀行広島共同ビル8階

TEL 082(247)2851(代)

FAX 082(504)0888

沖縄国際センター

〒901-21 沖縄県浦添市字前田1143-1

TEL 098(876)6000(代)

FAX 098(876)6014

編集後記

何であれ「初めの一步」には苦勞がつきものである。新しい意図のもとに編集されたこの冊子にも少なからぬ苦勞があった。特に「読んでもらえる・使ってもらえる冊子」にするにはどうしたらよいか、この点には神経を使った。冊子のタイトルにもそうした願いがこめられている。しかし「初めの一步」には喜びもある。それが、あるものの誕生でもあるからだ。その誕生が大きな成長につながっていくことを心から願っている。

ところで、われわれに進んで編集を引き受けさせたものは、研修先で出会った人たちの明るい笑顔と温かな人間としての心であった。あらためて彼らに感謝。(T. S.)

地球と語りたい

平成6年度 高校教師海外研修 ～開発教育への視点～

平成6年12月発行

発行者 国際協力事業団

〒163-04

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号

新宿三井ビル内私書箱216号

電話 03-3346-5029

© 1994 国際協力事業団 Printed in Japan

この冊子は再生紙を使用しています。

JICA

JICA
LIB